審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

研究の目的は、メディア・リテラシーを学ぶ学習者に対し、対話を通した意識化を目指すコーチングによって学習者の学びを支援する実践を行い、学習者の成果物を質的に分析することでコーチングの効果を明らかにすることであった。そこでは、１）フレイレの「対話と意識化」の方法として「教育におけるコーチング」を位置付けていること、２）メディア・リテラシー教育における「表明されたニーズ」について、聴くことを通した「対話と意識化」の可能性を明らかにすること、の２点において意義や独創性がある。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

研究の方法として、メディア・リテラシー教育およびコーチングについての理論的な分析をもとにして、学校教育においてメディア・リテラシーの授業を行うなかで、van Nieuwerburgh（2012）の GROW モデルを用いたコーチングを行ない、生徒への質問紙調査とインタビューに加えて、生徒の学習成果物を分析の対象とした。さらに、学習者によって異なる「表明されたニーズ」に関する学びを焦点として質的分析を行っている。したがって、研究の方法は当該学問分野において妥当である。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

研究資料として、質的研究の背景となる思考や方法を検討している。そのうえで、対話の内容や振り返りシート等のデータを収集し、反証可能性と省察可能性を兼ね備えた質的分析方法である大谷(2007)の SCAT（Steps for Coding and Theorization）法を用いて分析した。したがって、研究資料やデータの収集と分析が適切になされている。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか。

研究の考察において、得られた研究結果についての先行研究との検討及びメディア・リテラシー教育としての教育実践について、さらに質的分析結果をもとにした分析についてなどの考察を十分に行っている。さらに、結論については、メディア・リテラシーの学習におけるコーチングにおける対話と学びの意識化、自律的な学び、合意とフィードバックについてまとめており、学術的な水準に達している。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか。

教育において理論的な研究だけでなく、学校教育におけるメディア・リテラシー学習におけるコーチングを用いた実践的な研究を行なっており、今後のコーチングを用いた学校教育の指針を示すものであり、そのための成果を示している。したがって取得学位にふさわしい意義や成果が認められる。